

本日は受難週の礼拝ですから、キリストの受難についてルカの福音書から学びます。十字架上でキリストは「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」と祈られました。共に十字架につけられた罪人の一人はキリストを罵り、もう一人はキリストを信じて、ともにパラダイスにいくと約束されました。

1. 十字架上の死（44～46節）

①全地が暗くなり（44）「**そのときすでに十二時ごろになっていたが、全地が暗くなつて、三時まで続いた。**」

イエスが十字架につけられたのは午前九時でした（マルコ15:25）。それから三時間たった十二時ごろ（直訳では第六時）。全地は昼まであるにもかかわらず、暗くなり始めました。それが午後三時まで続きました。この間、キリストが語られた言葉は記されていません。

②太陽は光を失い（45）「**太陽は光を失っていた。また、神殿の幕は真っ二つに裂けた。**」

太陽からの光も失われていました。神なる方が地上での命を終えられる時だからこそ起きた現象でした。エルサレム神殿の至聖所と聖所を仕切る幕は、聖なるものと俗なるものを隔てるものでしたが、その幕が真っ二つに裂けたのです。マタイとマルコは、息を引き取られた後の出来事と記しています。なお、この出来事はイエスという肉体の垂れ幕を通して、神に近づく新しい、生ける道が開かれたことになるのです（ヘブル10:20）。

③わが靈を御手に（46）「**イエスは大声で叫んで、言われた。『父よ。わが靈を御手にゆだねます。こう言って、息を引き取られた。』**」

三時になってから、キリストが言われたお言葉には「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」がありました。「わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味です。その後、イエスは大きな声で叫ばれました。『父よ。わが靈を御手にゆだねます』。三位一体なる主の内の聖靈は、キリストご自身でもありましたが、それを父なる神に委ねられたのです。そして、主は息を引き取り、地上での命を終えられました。

2. イエスの死を見た人々の反応（47～49節）

①百人隊長は（47）「**この出来事を見た百人隊長は、神をほめたたえ、『ほんとうにこの人は正しい方であった』と言った。**」

そこにいて十字架の出来事を見た百人隊長は、神をほめたたえたのです。そして、『本当にこの人は正しい方だった』と言ったのです。マルコの福音書には『この方は本当に神の子であった。』とあります。ローマ人の百人隊長にそういうわせるほどに、莊厳な時だったのです。

②胸をたたいて悲しみ（48）「**また、この光景を見に集まっていた群衆もみな、こういろいろいろな出来事を見たので、胸をたたいて悲しみながら帰った。**」

イエスの十字架刑のことは、巷間の話題でありました。多くの人々がその光景を見に来ていたのです。そして、罪なく十字架に上り苦しまれて死なれた様、地が揺れ動き、岩が裂けたといって出来事は、単なる死刑とは異なり、人の心を打つ者がありました。彼らは胸をたたき、悲しみながら帰っていました。

- ③遠く離れて立った人々（49）「しかし、イエスの知人たちと、ガリラヤからイエスについて来ていた女たちとはみな、遠く離れて立ち、これらのことを見ていた。」

一方、イエスの周辺にいた知人たち、ガリラヤからイエスについてきた人たちや女たちが大勢、遠く離れて立って見ていました。それらの人々とは、マグダラのマリヤ、イエスの母マリヤ、弟のヤコブ、サロメもいました。

3. イエスの葬りに立ち会った人々（50～55節）

- ①アリマタヤのセフ（50～51）「さてここに、ヨセフという、議員のひとりで、りっぱな、正しい人がいた。この人は議員たちの計画や行動には同意しなかった。彼は、アリマタヤというユダヤ人の町の人で、神の国を待ち望んでいた。」

イエスの十字架の出来事にいたと思われるヨセフというユダヤ人議員（サンヘドリン）の議員がいました。彼はエルサレムから西北35キロほどにあるアリマタヤというユダヤ人の町の出身で立派な人でした。ヨハネの福音書には彼がクリスチヤンであったことが記されています。そこで、彼は他の議員たちのクリスチヤンに対する計画や行動に賛同しませんでした。また真摯に神の国を待ち望んでいました。

- ②イエスの葬り（52～53）「この人が、ピラトのところに行って、イエスのからだの下げる渡しを願った。それから、イエスを取り降ろして、亜麻布で包み、そしてまだれも葬ったことのない、岩に掘られた墓にイエスを納めた。」

この人は命を終えたイエスの亡骸を引き取るために、総督ピラトの所に行きました。議員からの申し出であったからこそ許されたのかもしれません。ヨセフは亡骸を十字架から取り降ろし、新しい亜麻布で包みました。そして、岩を掘って造った自分自身のもので（マタイ27:60）、まだ誰も埋葬されていない墓にイエスを納めたのです。

- ③ヨセフと墓に行った女性達（54～55）「この日は準備の日で、もう安息日が始まろうとしていた。ガリラヤからイエスといっしょに出て来た女たちは、ヨセフについて行って、墓と、イエスのからだの納められた様子を見届けた。」

その日は安息日の準備の日でした。このことはイエス・キリストが十字架につけられ葬られたのが金曜日であることを確認できます。安息日は金曜日の日没から土曜日の日没までです。数時間で安息日を迎える薄暮であったといえましょう。そうした時間にイエスは葬られたのです。ガリラヤから出てきた女たちも、イエスのからだの墓への葬りに立ち会いました。

《結論》 今朝の聖書箇所から三つのことを学びます。

第一は、イエスの死の出来事を見た人々についてです。群衆は、「胸をたたいて悲しみながら帰った」とあります。また、そこにいた百人隊長は「神をほめたたえた」とあります。ローマ人である彼が神をほめたたえるほどに、キリストの十字架でのお姿、お言葉には恵みと愛が溢れていたのだと思います。自己中心や自己保身、憎しみ、差別、妬み等々が全くない、愛と聖と義に満ちた最期だったのです。であればこそ、百人隊長の心は震わされたのです。それでは、こうしたイエス・キリストを私たちが味わえるのでしょうか。キリスト十字架の記事を熟読しましょう。そして祈りましょう。

第二に、イエスの亡骸を埋葬したアリマタヤのヨセフについてです。彼はサンヘドリンの議員でしたが、クリスチヤンになった人でした。あのニコデモを思い出しますね。彼もクリスチヤンになったと思われます。さて、このアリマタヤのヨセフですが、かなり勇気のある行動をしています。いくらユダヤ人議員だといっても、総督ピラトのところに直談判して、からだの下げる渡しを願い、許可を得て、遺骸を取り降ろし、亜麻布で遺骸を包むという人がためらうような仕事を進んで行っているのです。いったい、弟子達はどこに行ってしまったのでしょうか。彼は献身的でした。自分のために手に入れておいた墓にイエスの御遺骸を納めたのです。高価な香油を注いだマリヤのことが思い出されます。

第三に、「父よ。わが靈を御手にゆだねます」と言われて、息を引き取られた救い主イエス・キリストについてです。「息を引き取る」という言葉を読んで、一瞬、息を飲んでしまいます。神である方が人間の姿をとて来て下さい、神の国を宣べ伝え、癒しや、たくさんの奇跡のわざをなさいました。イエスは人間としての欲を満たそうとすることはせず、ただ自らを献げられました。逮捕され、むちで打たれ、殴られ、蹴とばされ、あげく十字架につけられました。人間として、痛みを受けてくださったのです。釘で打たれた手足からじわじわと出血が進み、ついに息を引き取られたのです。神である方は、その痛みの部分は受けずに、そのまま昇天するということもできただしよう。しかし、痛み苦しみを、そのまま受けられ、ついに息を引き取られたのです。人間として死ぬという道を踏んでくださったのです。詩篇88篇に「私は穴に下る者とともに数えられ、力のない者のようになっています。…そこは暗い所、深い淵です」とあります。どうしてそこまで…と思いますが、それは多くの人の罪を負い、とりなしをするためでした。「彼はそのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって私たちはいやされた」（イザヤ53:5）のです。私たちが受けるべき苦しみを、身代わりとなって受けてくださったのです。今、私たちができるることはこの方の十字架を無駄にせず、受難の主を信じていくことです。恵みによる救いを確かめていきましょう。またこの救いをいただいていきましょう。